

主体的に学び合う複式教育 ～学び合いの場を生み出すみとりと支援～

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案と関わって

今年度の本校研究主題は「学びをデザインする子どもたち」である。

では、複式学級における学びとはどのようなものであろう。複式学級では、「少人数」「異学年」がキーワードとなる。具体的には以下のような点が、特徴として挙げられる。

複式学級では、

- ・一人一人の活動の場が十分確保できる。
- ・一人一人の発言の機会が多くなる。
- ・異学年の子どもたちから学ぶことができる。
- ・司会や記録など自分たち主体で学習を進める技能や態度を身に付けやすい。

特に、複式学級の学びにおいては、司会と記録を子どもたち自身が行い、自分たちで主体的に学習を進めていくところに最大の特徴がある。

また、主体的な学びを成立するために、学習の基本的な流れを確立させて、子どもたちが十分理解し、学習を自分たちで進めやすいようにしている。

本校複式部では、学びの基本的な流れは以下の通りである。

学びの基本的な流れ

1. 見通す（どんなことを学ぶのか子どもたちが見通しをもつ。）
↓
2. 調べる・考える（課題に対する自分自身の考えをまとめる。）
↓
3. 確かめる（個々の考えを出し合い、吟味し、よりよい考えに高めていく。）
※場合によっては、「ひとり学び」と「全体学び」の間に、ペアや小グループの学びが入ることがある。
↓
4. 深める（学びを振り返り、自他の認識を更新すると共に、次の課題を確認する。）

このように見てみると、複式学級の学習形態は、「学びをデザインする子どもたち」という研究主題と非常に親和性があることが分かる。主体的に学び合い、子どもたちが学びをデザインすることが複式では自然な形で行うことができるのである。

しかし、これは決して学習の全てを子どもたちに委ねるということではない。学び合う主体は子どもたちであるが、そこには、教師の学びに対する、たしかなみとりと支援が不可欠である。

また、今年度の学校提案のサブテーマ「つなぐ・つむぐ・つくる」を、複式学級の特徴を生かすという視点から、次のようにとらえる。

「つなぐ」は、同学年同士の交流はもちろんのこと、異学年との交流も視野に入れることにする。異学年と交流することで、下の学年が上の学年の学習に興味を示したり、上の学年は学習の振り返り学習につながったりする。また、上の学年はリーダー性が育つきっかけとなり、下の学年は上の学年の深い考えにふれる機会となる。「つむぐ」は、複式学級の特徴である少人数という特性を生かせるであろう。一人一人の考えをみとりやすく、どの子どもどの子どもの考えを取り上げていけば学びの質の高まりが期待できるか計画しやすい。子どもたちにとっても互いの考えを理解しやすく、学び合いやすくなる。「つくる」についても異学年との交流を考える。下の学年の考えを理解したり、上の学年から学び取ったりすることで、自己を変容させることができる。

以上のことも考慮し、学びの質を高めていくよう取り組む。

子どもたちが学びをデザインし、その学びの質を高めていくためには、子どもたち一人一人が主体的に学んでいこうとする意欲がなければならない。そのためには、「この子は、どのようなことに関心や興味をもっているのか。」や「どのようなことであれば主体的に追究していくことができるのか。」といったことを教師がみとり、子どもたちの課題意識に寄り添いながら、学級全体で課題解決に向かえるような単元構成、教材の提示をする必要があるだろう。

子どもたちは、ある対象に出合ったとき、その対象について経験的に、あるいは既習内容を通してある程度理解できる部分と、その価値や他の対象との関係性など、わかっていない部分がある。それは、子どもたち一人一人違うものである。そこで問題解決に向かうコミュニケーションが発生し、新たな知識を獲得したり、認識を再構成したりする学びが成立する。

学びを成立させるために、教師は、単元全体の学習の中だけでなく、1時間の学習の中でも、学習させるべき内容の価値を理解し、児童の実態をみとった上で、課題を設定したり、必要があれば発問や指示を出したりするなど、学び合いの場をつくるためのみとりと支援が重要になる。

ここでいう「学び合いの場」とは、「子どもたちは対象と出会い、その中にある問題や課題を共有し、それによって生じる子どもたちの考えの違いに焦点化した対話によって、新たな知識を獲得したり認識を再構成したりするような場」のことである。

また、複式学級では、自分たちで主体的に学び合っていけるようにするために、学習内容と並行して「司会の進め方」「記録の仕方」「話し合い方」といった学び方を学ばせていく。その中で、学びの場では欠かせない表現力やコミュニケーション力を育成していきたい。

そこで、今年度複式部の研究テーマを「主体的に学び合う複式教育～学び合いの場を生み出すみとりと支援～」として研究を進めることにした。

(2) 複式でめざす子ども像

学校提案にもあるように、子どもたちは「対象」「他者」「自己」との三位一体の対話により学びを行っている。そうした中で子どもたち自身が自己の向上的変容、つまり、「対象」＝「まわりの事物・現象や教材」，「他者」＝「共に学ぶ仲間」，「自己」＝「自分」への認識が更新されていく。このことが学びに対する原動力となるのである。こうした実感を繰り返すことで、主体的に学び合い、学びをデザインしていく意欲が育っていくと考える。

また、自己の向上的変容を実感するためには、自分たちで学び合い、学習を進めていく技能や態度が必要である。具体的には、「物事に働きかけ疑問をもつ」「疑問の中から課題や目標を明らかにする」「意見や立場の違いを認めながら協力する」「目標に向かって行動する」といったものである。特に、「主体的に学び合う」ということを考えたとき、「主体的に物事に働きかけ、目標を設定し行動できる力」をもつ子どもに育てていかなければならないと考える。

学習においては、「計画 (plan) → 実行 (do) → 評価 (see) → 改善 (act)」のPDSA cycleを複式の学びで実現できる子というのが、複式部でめざす子ども像となる。

複式学級において主体的に学び合うには、全体で学び合う学習を進める中で「自分たちの学びが学習課題のねらいから外れていないか」ということを常に自己評価することが求められる。自分たちの学びが学習のねらいに向かって高まっているかどうかをメタ認知できる力も育てていきたい。

2. 複式における「学びをデザインする子どもたち」

複式部では、学びをデザインする子どもたちの姿を以下のように考えている。

	低学年	中学年	高学年
課題解決	教師とともに見通しをもつて、自分たちで解決しようとする。	教師の支援を受けつつ、自分たちで単元全体を見通しながら課題を解決しようとする。	今までの学習経験を活かしながら、課題解決に向けた学習を自分たちで方向付けようとする。

対 話	進んで意見を述べるとともに、友だちの意見との違いに気づこうと努力する。	自らの気づきを積極的に伝え合い、新たな考えを生み出そうとする。	全員がそれぞれの考えを伝え合い、多様な考えの中からより価値の高い考えを生み出そうとする。
学び方	司会係と記録係を立て、自分たちでできることは進めるようにすると共に、さまざまな学習形態を経験していく。	司会係を中心として、学習課題にあった学び方を選択し、自分たちで学習を進めていく。	司会係を中心として、今までの経験を活かして、課題に応じた学び方を選択していく。

具体的に複式学級での学びのデザインを以下に示してみる。

2年生『たし算とひき算』での学習場面

T ; この問題が解けるかな。

【学習課題】花が 13本 さいています。8本 つむと 何本 のこりますか。

解き方を、数え棒を使って説明できるかな。やってみよう。

(子どもたちは、ノートにそれぞれ考えた式を書き、数え棒を使って計算の仕方を表現している。)

みとり C6 → 13本の数え棒をほぼ等間隔に並べ、右側から8本取った。

(10を東に考えることを個別指導した。)

C2, C4, C7 → 数え棒を10本とその右に3本と分けて並べ、右側から8本取った。

C8 → 数え棒を10本とその右側に3本と分けて並べ、10本から8本取り残りの2本と3本をつけた。

(準備に時間がかかっている子もおり、ここまでしかみとれなかった。)

司会 ; できましたか。できた人は発表してください。

C1 ; $13 - 8 = 15$ です。

C全 ; 同じです。

司会 ; 説明できる人はいますか。

C2 ; 前に行ってもいいですか。

C全 ; いいです。

C4 ; 私は、13本から8本取りました。どうですか。

(数え棒を10本とその右側に3本と分けて並べ、右側から8本取る。)

C全 ; 同じです。

この時点では、みんな同じだと思っている。学習が止まったので、支援に入った。

T ; 本当に同じですか。取り方が違う子がいたと思うけどなあ。

C8 ; ぼくは、こうしました。

(数え棒を10本とその右側に3本と分けて並べ、10本の右側から8本取る。)

C7 ; 私は、こうしました。

(数え棒を10本とその右側に3本と分けて並べ、10本の左側から8本取る。)

T ; 式と合わせて考えてみようね。C8君とC7さんは、13の10から8を引いたんだね。

じゃあ、C4さんはどんなにしたのかなあ。

C8 ; 先に13の3本取って、10からあと5本取ったんだと思います。

C6 ; ああ、そうか。

T ; 何か気付いたの。

C6 ; 「8本取る」っていうのは、3本取って5本取るってことなんだ。

C4 ; うわあ、やり方いっぱいあるなあ。

子どもたちは、同じ式でも計算の仕方が様々であることを知った。

3. 研究の展望

複式授業で、学び合いの場を生み出すためのみとりと支援には以下の3点があると考える。

①単元の構成や、課題の工夫

子どもたちが興味や関心をもてるような単元や課題を提供する必要がある。さらに、学び合いの場を生み出すためには、子どもたちの多様な疑問や考えが引き出せるような課題を工夫しなければならない。教師はその多様な疑問や考えをみとりどの考えを引き出し、どんな考えを共有させるかを計画しておかなければならない。特に、複式学級では教師の手を離れる時間が長いので、単元の導入ではたしかなみとりと支援が必要になるはずである。

②1時間の授業の中で学び合いが焦点化されるためのみとりと支援

間接指導時は子どもたちが主体的に学び合い、学びをデザインできる時間であるが、子どもたちだけでは学びの質を高めることは難しい。そこで、教師は、学習させるべき内容の価値を理解し、児童の実態をみとった上で、必要があれば発問や指示を出したりするなど、より質の高い学びへと学びがデザインできるようなみとりと支援をしていかなければならない。

③主体的な学び方を学ばせるためのみとりと支援

学びをデザインし、主体的に学び合っていくために、子どもたち自身が司会や記録などの技能をもたなくてはならない。発達段階を考慮した具体的な目標を設定し、その達成のための手立てについてのみとりと支援が必要となる。

複式部では、以下のような表を作成し、発達段階に応じた学び方を身につけさせていきたいと考えている。

	話す・聞く	司会	記録
低学年	<ul style="list-style-type: none"> ペアで話したり、聞いたりできる。 みんなに聞こえる声の大きさで自分の考えを話す。 話し手を見ながら聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> 司会の役割を自覚できる。 偏りなく指名できる。 基本的な学習の流れに沿って進行できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 適切な大きさの文字で記録できる。 大事な言葉が目立つように記録できる。
中学年	<ul style="list-style-type: none"> 似た点や違いを考えながら自分の考えを話す。 自分の考えと比べながら聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> 似た意見や違う意見を整理して指名できる。 学習課題に合った進行ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> カラーマーカーや矢印などの記号を使い、大事な言葉が目立つように記録できる。 大まかな学習の流れが分かる記録ができる。
高学年	<ul style="list-style-type: none"> 視点や論点の広がりやずれを意識し、整理しながら話す。 話し手の意図を捉え、自分の考えと比べながら聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> 場や状況を考え、自ら応じたり問い返したりできる。 状況に応じて、臨機応変に進行ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 必要な内容を関連づけながら、記録できる。 出された意見を類型化できる。 反対意見や追加された意見を効果的に書き加え、学びの深まりが分かる記録ができる。

4. 研究の評価

研究の評価については、授業の様子を記録したビデオ・録音・写真、児童の書いた文章や図などを通してできるだけ詳細な記述の授業記録を作成する。特に「学び合い」がどのように成立していたかについては、授業記録の検討をより詳しく行い、児童の振り返りの記録と照らし合わせながら検証していく。比較については、年度当初と年度末の類似した学習単元で行うものとする。